

## 【書評】佐藤親賢（2025）『なぜプーチンは戦争を続けるのかーウ

クライナ侵攻が変えたロシアと世界』，東京堂出版

八代 尚宏<sup>1</sup>

### Book Review: *Naze Puchinwa Sensowo Tsuzukerunoka— Ukuraina-shinkoga Kaeta Roshiato Sekai* (Fundamental Reasons of Putin’s War on Ukraine: Changing Russia and the world) by Chikamasa Sato

YASHIRO Naohiro

本書は 2024 年まで共同通信社モスクワ支局長であった筆者が、25 年 1 月に出版した最新作である。全部で序章と 8 章からなり、戦争が始まってから現在に至るまでの出来事やその論点が時系列で整理されている。その中で、もっとも重要なものは対ウクライナ戦争を開始したプーチン大統領の考え方である。

2022 年 2 月に始まったロシアとウクライナとの戦争では、両軍の死者が 17 万 2500 人（24 年 10 月時点のニューヨークタイムス試算）と膨大な数に達している。この内、侵攻したロシアの死者数は 11 万 5 千人とウクライナの倍以上となっている。

筆者は、ロシアの侵攻は国際法違反で容認できない行為とする。しかし、戦争が始まった直接の原因がロシアの先制攻撃にあるからといって、ロシアを非難するだけでは、今後の対処方針も浮かんでこない。プーチンの考え方を理解することは、ロシア現政権への支持・不支持とは別の話としている。

#### ロシアとは何か

この戦争について、筆者の「現在も続くソ連崩壊のプロセスの一環」という視点は重要である。91 年に独立したウクライナの国民も、元々、ロシア人とは一体的な形で混在して居住していた。それが突如として日本の県境のような区分が国境になってしまい、それはロシア人やウクライナ人の人口集積の分布に見合ったものではなかった。

筆者によれば、これはプーチン大統領にとって、「ロシアとは何か」という基本的な問題という。ウクライナ東部やクリミア半島のように多数のロシア人が住む地域は「見捨てることのできないロシアの一部」である。このため、2014 年にウクライナでロシア系住民が多

---

<sup>1</sup> 昭和女子大学現代ビジネス研究所顧問・昭和女子大学特命教授

数を占めるクリミア自治共和国を、一方的な住民投票を経てロシアに編入した。他方で、やはりロシア人が多数を占めるドンバス 2 州については、外交的解決を目指し、ウクライナとの間で、高度な自治権を与えるというミンスク合意を結んだ。しかし、その後、ウクライナの大統領になったゼレンスキーは、その合意履行よりも EU や NATO への早期加盟を模索したことで、ロシアとの対立が強まったという。

この背景には、2008 年の NATO 首脳会議のブカレスト宣言で、欧米側がウクライナとジョージアが、将来、NATO のメンバーになることで合意したことがある。これは当時、独仏の難色にも関わらず米国のブッシュ政権の後押しによるものであったが、プーチンは絶対に容認できないと明確に表明していた。ロシアと長い国境を接する隣国ウクライナが、ロシアを仮想敵とする軍事同盟に加わり、ロシアとの国境付近にミサイルを配置されることは、ロシアにとって重大な安全保障上の脅威となるためである。このため、ロシアは NATO の東方諸国への不拡大を、何回も米国に求めており、ウクライナ侵攻直前の 2021 年 12 月に行われた米国のバイデン大統領とのテレビ会談でも、ウクライナの NATO 加盟を認めないことの法的保証を求めたという。

他方、ウクライナも米国に対して、ロシアからの安全保障を求めている。この点での大きな争点に核管理体制がある。ウクライナはソ連崩壊後に、それまで所有していた核兵器をロシアに引き渡した。しかし、仮に休戦後も安全保障が確保できなければ、既存の原子力発電所を用いて独自に再開発をする意向があり、その能力もある。

### 「侵攻後」のロシアとどう向き合うか

欧米に対するウクライナの要求は、NATO への即刻加盟、占領地の返還、天然資源保護と対ロシア制裁強化である。しかし、元々、ウクライナの NATO 加盟を阻止することがロシア侵攻の目的であったことから、これは受け入れられないであろう。

筆者は「ウクライナ侵攻は容認できない過ち」としながらも、ロシア内の急進派を抑える上で、プーチンは対話の相手として最悪の選択肢ではないとしている。また、欧米諸国が、現状のまま戦闘継続を支持し、更なる戦死者を増やす巨額の軍事支援を続けることには強い違和感をもつとしている。第 2 次トランプ政権で、停戦を視野に入れた動きは進行しているが、どこまでウクライナの納得のいく解決策が得られるのだろうか。

プーチンはウクライナ戦争を、米国にとってのキューバ危機と同じ状況としている。米国のカストロ政権打倒を防ぐために、フルシチョフはキューバにミサイルを供与しようとした。しかし、ケネディ大統領は、海を隔てた隣国にミサイルが設置されることを断固阻止するために、第三次世界大戦を覚悟した。この対立は、結局、米国がキューバの安全を保証することでソ連はミサイルを引き上げた。トランプとしては、ウクライナを今後とも NATO に加盟させない代わりに、どのようにして、その安全を保障することをプーチンに約束させられるだろうか。本書は、ロシア・ウクライナ戦争を、プーチンの視点から理解する貴重な著作といえる。